

南北問題の登場には、第二次大戦後独立を達成した旧植民地の諸民族が、一九五〇～六〇年代に国際舞台で政治的発言力を増し、加えて東西問題の反映として旧帝国主義「北」側が「南」の経済開発の要求に応えねばならなくなった、という背景があった。南北問題は、すぐれて戦後の特徴的事象である。

この南北問題は、一九六四年の第一回総会で設立され、その後四年ないし三年間隔で総会を開いてきたUNCTAD（国連貿易開発会議）を主たる舞台として展開されてきた。UNCTADを成立させた論拠は、自由貿易を原則とするGATT（関税と貿易に関する一般協定）体制が本質的に先進国本位であり、この体制のもとでは「南」の発展の展望が開けないということであった。七二年の第三回総会はアシェンテ社会主義政権下のチリのサンチャゴで開かれたが、開催地に象徴されるように、七〇年代前半までの時期は、「南」が団結の力によってUNCT

ADの場で「北」側に要求をつきつけ、攻勢をかけるという側面がクローズアップされた時期である。この「南」・「北」対峙の頂点に位置するのが、七四年の第六回国連資源特別総会であり、そこで多数決で採択されたNIEO（新国際経済秩序）樹立宣言にはかならない。

では、NIEOとは何か。それは、「南」側が自国の「あらゆる富、天然資源、及び経済活動に対して恒久主権を確立」し、自主的な発展を実現すべく、一次産品の交易条件の改善、多国籍企業の規制、技術移転の促進、経済発展のための新しい貿易政策の採用、などを求めるものであった。つまり、「南」の資源主権と経済的ナショナリズムの国際的認知を国連の場でかちとり、市場メカニズムに導かれる「北」側本位の自由貿易秩序に規制を加えて、新しい国際的経済秩序を創造しようというものにほかならない。ちなみに、NIEOを支えた理論は、UNCTAD初代事務局長R・プレビッツに代表されるラテンアメリカ構造主義をひきついだものであり、それは、「南」の貧困の原因を、世界貿易を通じて周辺部が一次産品モノカルチャーの鑄型にはめこまれてきた歴史に求め、したがって、経済発展のためには、工業化と国際分業の改革が必要だと主張したのであった。

さて、国連総会におけるNIEO樹立宣言を受けて、一九七五年には、コレアUNCTAD議長により一次産品一八品目の共通備蓄のための共通基金（Common Fund）が提案され、翌

七六年にはコロomboでの非同盟諸国会議において集団的自力更生 (collective self-reliance) が提唱された。だが、これらNIEOの原理具体化の措置は、「北」の消極的態度のため容易に実現せず、後退を重ねた。たとえば、一次産品共通基金は、七六年のUNCTAD第四回総会 (ナイロビ) では、対象品目が決定されただけで、七九年の第五回総会に至っても、当初の六〇億ドルの基金が七・五億ドルに大幅に減額されて合意されたものの、拠出金問題のため実現されなかった。「南」の集団的自力更生の進展も芳しくなかった。このため、八一年メキシコのカンクンで開催されたいわゆる南北サミットで、「南」側は、一次産品・貿易・工業化・通貨金融・石油エネルギーの五分野での、南北間の包括交渉 (global negotiation) を要求する。しかし、この包括交渉も国連の場で合意されこそすれ、実際にはみるべき成果は得られなかった。それにしても、なぜ、NIEOは急速に色褪せたのか。一般に南南問題という表現を生んだような「南」の分解現象が交渉力を奪ったことは間違いない。一時は資源ナショナリズムの旗手としてNIEO宣言の国連決議を促した産油国は、膨大なオイル・マネーを資金源として急速な工業化をすすめ、また輸出主導型成長をめざしたNICs (新興工業諸国) は、他の国々を引き離して高度成長を実現したが、その一方で、多くの「南」側諸国は、石油価格の上昇、「北」側の長期不況など不利な国際環境のもとで、十分な経済発展を遂げることができず、こ

うして「南」側諸国の間に大きな落差が生じたのである。OPEC (石油輸出国機構) 諸国とNICsの成長は、実は、南北交渉の枠組がもたらした成果ともいえるが、両者とも、その成長パターンの性格のゆえに「北」に対する対立よりもむしろ利害の一致による協調を強めた。

一九八〇年代に入ってにわかにクローズアップされてきた累積債務問題も、「北」側債権者への「南」の依存を強めるように作用しており、多くの発展途上国が国際的な利子生み資本の運動にとりこまれていくことを示している。そして、八〇年代初めの世界不況、一次産品価格の低迷、利子率の高騰といった状況のもとで、債務償還不能に陥った少なからぬ発展途上国 (重債務国) は、支払猶予や追加融資にさいしIMF (国際通貨基金) から課される諸条件によって、経済政策の自由を失うというところまで立ち至っているのである。

こうして、UNCTAD第一回総会 (一九六四年) からNIEO宣言 (七四年) に至る「南」の攻勢を支えた国際的政治経済構造は、大きく変わってしまった。もちろん《南北問題》は解決されたわけではなく、「南」内部の貧困、不平等、環境破壊はいっそう深刻になっている。NIEOの理念を生かしつつ民衆の立場に立った社会改革を実現していく新しい戦略と、それを少しでも容易にする国際的枠組の形成がいまほど求められていることはない。

〔平川 均〕